

有栖山公園通信

其乃拾六

平成十八年十二月三十一日（コミックマーケット71）

有栖山公園 (<http://www.aliceyama.jp/>)

有栖山 葡萄 (budou@aliceyama.jp)

有栖山公園は「かもすぞジャパン」を応援しています



はじめまして&おひさしぶり。本日は御立寄りありがとうございます。

「有^{ありすやま}栖^{ぶどう}山 葡萄」と申します、しがない二次創作小説書き同人屋でございます。

続編を期待されて何度も足を運んでいただいた方々、大変長らくお待たせしました！「恋戦」、ついに完結いたしました。結末はもともとこういう感じでしたが、予想以上に仕込んでいたネタを消化していませんね。残念。しかし今回完結させることを念頭において、且つネタを出来る限り使おうという感じでがんばりました。楽しんでいただければによりです。

次回作は、また新しい感じの作品が書けるといいなと思いつつ、活動を続けていきますよお～

作者近況を。

只今無職部です。といっても、年が明けて新しい会社に入のですが……

またもや飲食業界なのですが、今のところよりも規模が大きい所に引っこ抜かれました。いわゆる「頭狩り」ってやつですか？ 世間では聞いた事ありましたが、まさか自分の身に起きるとはおもっていませんでしたよ。

ということで、夏コミの原稿は早めに掛からないといけないなぁということですか。なんか同人活動始めてから、転職3回目のような……

では、まだどこかでお会いしましょう。今度は来年の夏でしょうか？

それでは皆さん、よいお年を～

2006年大晦日 有栖山葡萄拜

今回の本の修正箇所 16ページ 上段 3行目

今回はかなりしっかりとチェックしたのですが、こんなわけのわからない文章が。ごめんなさい、相変わらずでした orz

「孝之が水月からの呼び出された孝之が丘に向かうと、そこには遙が待っていた。」
→「水月からの呼び出しに孝之が丘に向かうと、そこには遙が待っていた。」

……ツき……み……つ……き……おわ……りよ……
まだ眠りから覚めない意識に感じる。
声。紛れも無い、聞き覚えのある声色。それは忘れずもない親友の声。

真っ白い世界に黒い霧が浮かぶ。そして、霧の一部が分かれ人の形が浮かぶ。ぼんやりとしていた形は、徐々にはつきりと細部まで人の形になっていく。

それは、彼女の見覚えのある姿。忘れるはずも、無い親友の姿。

「はる……か？」

水月が問い掛けるように呟く。そのモノはやさしく、そして迎りが凍りつくような微笑を浮かべる。

「水月、夢の時間はおわりだよ。もう終わりなの。今度はあなたが闇の世界に、何も無い世界に行く番よ。阿多長い参る場所は、本当は私の居る場所なんだから。わかっているよね、そんなこと？ また、会いましょう。待っててね、ばいばい……」

それだけ言うと霧は形を失っていく。白い世界が徐々に溶け出した黒に覆われていく。

「っ！ はるかっ、待ってっ！」

叫ぶと同時に体が飛び起き、水月は目を覚ました。いやな汗が体にまとわりついている。

「夢？」

彼女が横を見ると、いつもと変わらない幸せそうな寝顔の孝之が居る。その事を確認して少し落ち着いた彼女は、彼を起さないようにそっとベッドから抜け出し、キッチンで水を飲み一息ついた。

今の夢を思い出す。近頃よく見ていた夢というよりも、意識に直接聞こえてくる声。近頃漠然と感じていた不安。今日ははつきりと聞こえた。さっきの言葉はなんだったのだろうか。それは遙だったのだろうか。

水月は自らの手で自身を抱きしめる。身体が震えていた。寒さからではない、何かに怯えているかのように。

その怯えの正体を、彼女自身は知っている。今が仮初の幸せではないかという、常に抱いている不安だ。